

福井の戦国をひも解く

福井の戦国

歴史秘話

福井の戦国年表

朝倉孝景

応永35(1428)年～文明13(1481)年

朝倉氏景

文安6(1449)年～文明18(1486)年

朝倉貞景

文明5(1473)年～永正9(1512)年

朝倉孝景

明応2(1493)年～天文17(1548)年

朝倉義景

天文2(1533)年～天正元(1573)年

柴田勝家

大永2(1522)年～天正11(1583)年

結城秀康

天正2(1574)年～慶長12(1607)年

慶長6(1601)年～慶長12(1607)年



朝倉孝景



朝倉義景



柴田勝家

お市



結城秀康

1450

1500

1550

1600

● 宝徳3(1451)年 あさくら たかかげ 朝倉孝景、家督を継ぐ

● 応仁元(1467)年 応仁の乱で西軍として活躍

● 文明3(1471)年 東軍に寝返る
河俣の合戦を皮切りに越前統一を目指す

● 文明13(1481)年 しゅう かげ 氏景、家督を継ぐ

● 文明18(1486)年 さだ かげ 貞景、家督を継ぐ

● 永正3(1506)年 九頭竜川の戦いで
加賀の一向一揆を撃退

● 永正9(1512)年 たか かげ 孝景、家督を継ぐ

● 天文2(1533)年 よし かげ 義景、生まれる

● 天文17(1548)年 義景、家督を継ぐ

● 天文24(1555)年 あさくら そう ぎ 朝倉宗滴、死去

● 永禄6(1563)年 国吉城籠城戦が始まる

● 永禄11(1568)年 あし かげ 足利義昭、朝倉館御成
おだ の なが 織田信長、上洛

● 元亀元(1570)年 姉川の合戦

● 天正元(1573)年 刀根坂の合戦で大敗。大野で義景自害

● 天正3(1575)年 しば たか かげ 柴田勝家、信長より越前北庄を与えられる

● 天正11(1583)年 賤ヶ岳の戦いで敗走。
おの しろ 北庄城でお市とともに自害

● 慶長6(1601)年 ゆう き ひで やす 結城秀康、越前68万石を与えられ
福井藩主となる

● 慶長12(1607)年 まつ へい ちゆう だく 秀康、病没。松平忠直が家督を継ぐ

福井の戦国

歴史秘話

INDEX

1	朝倉氏 103 年の越前支配の礎を築いた朝倉孝景	P.03
2	軍事力と財力で越前支配を強固にした朝倉氏景・貞景・孝景	P.04
3	信長を追い込んだ朝倉義景と元亀争乱	P.05
4	越前朝倉氏の隆盛を支えた名将、朝倉宗滴	P.06
5	朝倉宗滴、他に類をみない養鷹法に成功する	P.07
6	実戦で大太刀を振るった勇将、真柄十郎左衛門	P.08
7	朝倉義景が厚礼を尽くした感状を得た男、大安寺又四郎	P.09
8	朝倉義景時代の外交官、鳥居景近	P.10
9	朝倉・信長・一向一揆を敵に回し、乱世に散った富田長繁	P.11
10	朝倉氏に仕え金津を百年治めた溝江氏	P.12
11	一乗谷に舞い降りた“越前の楊貴妃”小少将	P.13
12	地形だけでなく支城や防御施設で守られていた一乗谷	P.14
13	朝倉氏と京都の古刹との意外な関係	P.15
14	ステータスシンボル、庭園が教えてくれる朝倉氏の風情	P.16
15	知将、明智光秀の再起の地への思い	P.17
16	越前の称念寺門前で再起を図った明智光秀	P.18
17	明智光秀の活躍は越前から始まった	P.19
18	足利義昭と明智光秀のゆかりの地、御所・安養寺跡	P.20
19	若狭と近江の国境・熊川と明智光秀の関係	P.21
20	中世の若狭を治めた守護職武田氏の盛衰	P.22
21	“難攻不落”の若狭国古城と「国吉籠城戦」の真実	P.23
22	高浜繁栄の道を拓いた逸見昌経	P.24
23	浄土真宗の古刹に眠る女性の肖像画の謎	P.25
24	戦国大名が愛した幸若舞～越前生まれの日本を代表する芸能～	P.26
25	北陸の奇勝、東尋坊と平泉寺のつながり	P.27
26	中世日本の海運の要、越前の湊	P.28
27	柴田勝家の亡霊は、北庄創成の神	P.29
28	治政に長けた智将でもあった猛将・柴田勝家	P.30
29	越前支配の拠点・北庄城と半石半木の奇橋・九十九橋	P.31
30	北庄城の落城 柴田勝家らにまつわる数々の悲劇	P.32
31	生存説が残る絶世の美女、お市	P.33
32	天下分け目の清洲会議～お市の内に秘めた決意～	P.34
33	細やかな心遣いと思いやりを持つ、優しき女性「初」	P.35
34	福井藩を襲ったお市の祟り!? ～呪われた松平忠直と光道～	P.36
35	越前大野城を築いた金森長近と「亀山」の由来	P.37
36	敦賀城主、大谷吉継が見た敦賀湊の繁栄	P.38
37	「米五郎左」若狭の戦国に幕を下ろす	P.39
38	暦の全国統一もついで本能寺の変～織田信長と明智光秀と土御門家～	P.40
39	北陸唯一の現存天守 丸岡城の当時の姿とは	P.41
40	凄惨な一揆弾圧を伝える瓦～小丸城跡出土の文字丸瓦と府中三人衆～	P.42
41	賤ヶ岳の戦いで勝家が本陣を置いた幻の玄蕃尾城	P.43
42	不屈の精神で最後には認められた結城秀康	P.44
43	松平忠直は本当に「暴君」だったのか	P.45
44	徳川家康を支えた鬼の作左衛門と福井の関わり	P.46
45	徳川家康が信頼した「万端の用人」、本多富正	P.47
46	結城秀康に信頼され加賀藩の抑えとなった多賀谷左近三経	P.48
47	京極高次、「鯖街道」起点の礎を築く	P.49

朝倉氏 103年の

越前支配の礎を築いた

朝倉孝景



朝倉孝景肖像 (心月寺蔵)

戦 国時代への転換点となった応仁の乱。その大乱で最も恐れられ、これを機に戦国大名として名をあげたのが朝倉孝景です。

孝景は、正長元(1428)年、越前の守護(軍事指揮官、行政官)であった斯波氏の家臣である朝倉家景の子として生まれます。孝景は幼い頃から才知に優れ、ある時、都大路を進んでいた將軍足利義教が、道端にいた幼少の孝景を一目見て、まさに英傑の相と感嘆したと伝わっています(『月舟和尚語録』)。

応仁元(1467)年、守護の

細川勝元と山名宗全の二大勢力が衝突。これに、斯波氏の内紛や將軍家の跡目争いなどがからみ、世に言う応仁の乱が始まります。細川方は東軍、山名方は西軍と呼ばれ、孝景は斯波義廉の家臣として西軍に属しました。孝景は、京都での御霊合戦や相国寺の戦いなどに参戦し目覚ましい活躍を見せます。武田信賢の軍勢を襲撃した際には、討ち取った24の首の前で宴会を開き「この首は山名宗全に見せるため置いたものだ」と語ったといわれ、その豪胆さが伝わっています。足利義政が西軍の追討令を出した際には、義廉の降伏条

件として孝景の首を要求するほど、孝景は東軍にとって恐るべき存在でした(『大乘院社雑事記』)。

こうした中、幕府の伊勢貞親らによる孝景の東軍への勧誘工作がなされます。文明3(1471)年5月、孝景へ「越前国守護職のことは孝景の希望どおりにする」と記された御内書と「御判(守護職補任状)」が発給されるよう取り計らう」という細川勝元の書状が届きます。この御内書の発給により孝景は寝返りを決断。翌月、孝景の嫡子朝倉氏景の東軍への寝返りが明らかになり、それに呼応して孝景は越前国へ出陣しました。

ところが、御判は発給されず、孝景は非常に弱い立場での合戦を強いられることになったといわれています。守護ではなく国司と称して戦ったとされる甲斐勢との戦いには敗北します。しかし、体制を立て直し、府中攻略で勝利を収め、その後も各地で戦を繰り広げ勢力を拡大。文明7(1475)年、ついに越前平定を成し遂げました。逆境に立たされ、敗戦の苦汁をなめながらも、最後には自らの力で越前支配の正当性を獲得したのです。

下克上の先駆者ともいわれる朝倉孝景。越前国の掌握を進め、一乗谷

に城を構えるなど、国主としての施策の積み重ねがその礎を築いていったのです。その心構えは「朝倉孝景条々」として今に伝わっています。



『朝倉孝景条々』(明治大学図書館蔵)

関連史料・ゆかりの地

英林塚



(画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

朝倉孝景の墓。「英林」という名は、孝景が出家した時の名です。この塚は、越前に危機が迫ると鳴動すると伝わっています。

【住所】 福井市城内ノ内町(一乗谷朝倉氏遺跡の唐門から徒歩5分)

軍事力と経済力で

越前支配を強固にした

朝倉氏景・貞景・孝景

越 前一国に朝倉氏支配の基礎を築いた朝倉孝景（初代）。その支配を強固なものとしていったのが、2代・氏景、3代・貞景、4代・孝景です。

文明13（1481）年7月、初代孝景が没すると嫡子の氏景が家督を継ぎます。室町幕府に御礼の品々を進上し、返礼の御内書と剣を賜り正式に継承が認められました。その後、氏景は国内の大寺社の所領を安堵し、家来に知行をあてがって新しい当主になったことを国中に示しました。

氏景は父、孝景の残した斯波氏・甲斐氏との抗争に勝利し、文明15（1483）年、越前国守護代の地

位に登りつめました。また、その経済力を背景に運上金を怠らなかつたため、幕府から高く評価されました。しかし、孝景が没したわずか5年後の文明18（1486）年に38歳で没してしまいます。

3代貞景は文明18（1486）年、14歳で朝倉氏の家督を継ぎ、大叔父の経景、慈視院光玖、景冬らに支えられ、その地位を最初から確立します。また、貞景は近隣の実力者である美濃斎藤氏と縁組みし、両国は以後長く同盟関係を保ちました。

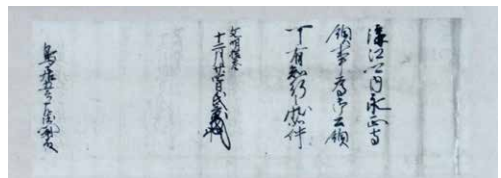
室町幕府の内部抗争である明応の政変の後、越中に下向した將軍足利義材を貞景は支持しました。しかし、義材の上洛に際しては、一乗谷に入

れて歓待するにとどめ、自ら軍事支援を行うことはしませんでした。

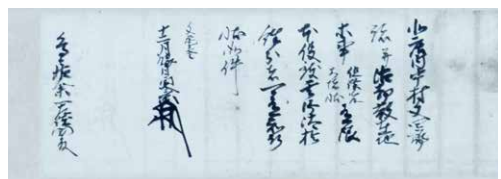
貞景の大叔父世代の指導者たちが没すると、敦賀郡司景冬の息子の景豊が貞景に謀反を起こします。文明3（1503）年、貞景は初代朝倉孝景の末子教景（宗滴）を抜擢して敦賀に出兵し、景豊を滅ぼしました。貞景にとつて朝倉氏の越前支配体制の確立が最大の課題であり、それはこの反乱を鎮圧することによってなされたのです。

4代孝景の時期には、ほぼ数年ごとにと若狭・近江・美濃・加賀などの隣国や丹後、京都などに出兵しています。いずれも当主の孝景は出陣せず、敦賀郡司や大野郡司などの一族が大部隊を率いて数か月間在陣したのですが、これらの出兵の多くは將軍の要請によるものでした。こうしたこともあり、幕府における朝倉氏の位置付けも、ほぼ守護と同格となり、ついに孝景は御供衆から御相伴衆に列したのです。

越前支配を強固にし、名実ともに越前の国主の地位を手にする道程を進めた2代・氏景、3代・貞景、4代・孝景。彼らが積み重ねた功績は、戦国時代にあつて、いち早く平和と繁栄の日々を一乗谷にもたらしていつ



朝倉氏景知行宛行状（『鳥居文書』）
（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵）



朝倉貞景知行宛行状（『鳥居文書』）
（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵）

たのです。

関連史料・ゆかりの地

氏景、貞景が当主として鳥居氏の知行（土地）を宛てがったもの。

「城下町」への出入り口、「下城戸」と「安波賀」



下城戸（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

土塁が築かれ城下町への出入り口となっていた下城戸。下城戸に隣接する安波賀には、3代当主朝倉貞景の時代、京都を追われた足利義材が滞在した含蔵寺があったといひます。

【住所】福井市安波賀町（JR 福井駅から浄教寺行き京福バス「安波賀」下車3分）

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『越前朝倉氏・一乗谷 眠りからさめた戦国の城下町』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館古文書調査資料3 越前・朝倉氏関係年表』

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

信長を追い込んだ

朝倉義景と 元亀争乱



朝倉義景肖像
(心月寺蔵)

天 下統一を目前に控えた織田信長にも危機的状況に陥った時期がありました。それが元亀年間です。信長は朝倉氏などを敵として、天下の成敗権を將軍足利義昭に認めさせ、4年にわたって攻撃しました。朝倉氏はこれに正面から対決。この戦いは、当時の年号から「元亀争乱」と呼ばれています。

元亀元（1570）年4月、信長は朝倉氏征伐に出発し、敦賀郡を攻略しました。しかし、近江の六角氏や浅井氏がその背後を衝いたため失敗し、京都に逃げ帰ります。撤退戦

で有名な「金ヶ崎の退口」です。その後、信長は三河（愛知県）から遠江（静岡県）に進出した徳川家康の合力を得て、近江（滋賀県）の姉川で朝倉・浅井軍と決戦を行いました。勝敗はつきませんでした。その後、三好三人衆が攻勢を強め、また本願寺顕如が信長との対決姿勢を明らかにしたことなどから、朝倉義景は浅井氏や一向一揆と連合して近江坂本に出兵。秋以降、朝倉氏は坂本から比叡山に展開し、信長と対陣します。これが信長最大の危機とされる「志賀の陣」です。信長は、將軍義昭や宮中にすがって和睦を乞い、

兵を戻しました。朝倉氏は、あと一歩で信長を滅亡させることができたといわれています。

元亀2（1571）年、信長は、前年朝倉氏に協力した比叡山延暦寺と坂本日吉社を焼討ちにします。そして、元亀3（1572）年には、小谷城への本格的な攻勢を始めました。一方、甲斐（山梨県）では、武田信玄が遠江に侵攻し、信長らを東西から挟み撃ちしようとして、義景に出陣を要請します。義景は自ら出陣して小谷城の支城、大嶽城に籠城しました。信玄は三方ヶ原の合戦で徳川家康を破ります。信長を滅亡に追い込むチャンスがもう一度訪れたのです。

しかし、同年12月に、義景は兵糧米補給の不安から越前へ帰陣します。実は、この裏では、上杉謙信が信長の依頼を受けて帰国を勧めたのです。

元亀4（1573）年、信長が湖西を攻めたことから、義景は浅井氏



羽柴秀吉書状
(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵)

救援のため敦賀に出陣します。信長が岐阜に帰陣したときに近江に出陣するも、信長の攻撃で小谷城救援に失敗。さらに退却の途中、近江から敦賀に至る刀根坂で信長方に大敗して大きな損失をこうむりました。義景は一乗谷に帰陣しますが、重臣の朝倉景鏡の裏切りにあい、自害するのです。

近江の地を戦場として覇権が争われた元亀争乱。約4年の歳月をかけた戦いで、朝倉氏は好機をものにならずに最後には滅亡することになり、一方で、信長は天下統一に大きく進む転換点となったのです。

関連史料・ゆかりの地

朝倉義景墓所



(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

元亀4（1573）年8月20日、朝倉義景は大野の六坊賢松寺で果てました。この寺は廃寺となっており、どこにあったのかもよくわかっていません。現在、大野市泉町には賢松寺から移設されたと考えられる「朝倉義景墓所」（大野市指定史跡）があります。

【住所】大野市泉町10（JR 越前大野駅より徒歩 15分）

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『越前朝倉氏・一乗谷 眠りからさめた戦国城下町』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館古文書調査資料3 越前・朝倉氏関係年表』

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

越前朝倉氏の

隆盛を支えた名将、

朝倉宗滴

あさくら そうてき

戦 国乱世にあって「静かに治まる国」と評された北陸の大國、越前朝倉氏。その歴代当主を補佐し、朝倉氏の盛威を高めた「軍奉行」であったのが、朝倉宗滴です。

宗滴は、文明9（1477）年、朝倉氏初代当主、朝倉孝景の末子として生まれました。歴代当主が称した小太郎教景を名乗っていた時期があり、嫡男として遇されていたともいわれています。

文龜3（1503）年、敦賀郡司であった朝倉景豊が謀反を計画。縁者にあたる宗滴は景豊から勧誘を受けますが、たとえ多くの怨念があっても、当主を裏切るべきではないと考え、謀反を三代当主、朝倉貞景



に通報。宗滴はその恩賞として敦賀郡司に任命され、以後、一族の重鎮として朝倉家を支える存在となっていました。

永正3（1506）年7月、加賀・越中・能登の一揆勢が越前に侵入。30万の軍勢に対し、宗滴が総大将となり、わずか1万騎ほどの軍で応戦しました。九頭竜川を挟んで対峙した後、宗滴は、敵の大軍に味方の小勢、待つよりも打って出るべしと、8月5日の夜、自ら約3千の兵とともに川を渡り、奇襲を仕掛けました。不意をつかれた一揆勢はたちまち総崩れとなり、退却。総大将自ら危険を顧みず大軍に乗り込むという、宗滴の勇猛果敢さが、朝倉の武威を国

外に示す事になりました。

宗滴は、他国へも出陣。若狭・丹後・近江・美濃・京都など数か国に及びました。これらは、幕府の要請によるものも多く、朝倉家の家格上昇につながったといえます。大永5（1525）年、京極氏・六角氏と近江で対立していた浅井亮政（浅井長政の祖父）から救援の要請を受けた際には、宗滴は小谷城へ出陣。戦いの勝敗は決せず、最後は、宗滴が両者の仲介役を果たします。この仲介が、朝倉・浅井両家の絆をつくり、後に姉川の戦いをもたらす浅井長政による織田信長裏切りの伏線となったといわれています。

天文24（1555）年、宗滴は、総大将として加賀一向一揆との戦いに出陣。その最中、病に倒れ79歳の



朝倉氏の拠点、一乗谷
（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

生涯を閉じます。まさに人生の幕引きの時まで、朝倉を支え続けたのです。

宗滴の言葉を記した『朝倉宗滴話記』には、「天下を取り、御屋形様（朝倉義景）を上京させるための謀略をさまざまに思案する間に夜を明かした」という言葉が残っています。宗滴には、義景を奉じて天下に君臨しようという野望があったのです。宗滴のその思いが、100年に及ぶ朝倉の隆盛を支えたといえるのではないのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地

西山光照寺跡



（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

一乗谷で最大規模を誇った寺院、西山光照寺。この付近には朝倉宗滴の屋敷があったと伝わっています。宗滴は、屋敷の庭で鷹を卵から育てる人工繁殖を行っていたことで知られています。

【住所】福井市安波賀町（JR一乗谷駅より徒歩5分）

あさくらそうてき

朝倉宗滴、

他に類をみない

養鷹法に成功する

戦

国大名にとって鷹狩は権力・経済力を象徴する嗜みであり、鷹の収集は戦国武将に共通する関心事でした。このため、鷹の交易や、優れた鷹を贈ったり鷹狩の獲物を献上する贈答儀礼は大名間で多く



鷲鷹図屏風 (左隻 / 円立寺蔵)

戦国武将の間で「鷹」は贈答品としても大変好まれました。宗滴は鷹に関する調教、飼育技術を研究し、当時で唯一、鷹の人工飼育に成功した人物ともいわれています。



みられました。

朝倉氏の場合には、家中で鷹狩の知識・技術が普及しており、特に、朝倉宗滴は、庭で飼育する鷹に卵を産ませ孵化させるといって他に類をみない養鷹法に成功しています。通常、鷹は巣から雛を取って育てるか、若い鷹を捕えて飼育調教しますが、つがいを繁殖させて卵から育てる方法は大変珍しかったといえます。



オオタカ

(画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

また、宗滴が育てた鷹は百発百中で獲物を仕留めると評判で、都でも話題になったほどでした。

宗滴の鷹の飼育を記した『養鷹記』によれば、朝倉家には代々『唐流鷹秘訣条々』という鷹の飼育・訓練マニュアルが伝わっていたとされます。また、越前西谷の武士、外山余次郎に相伝された『鷹書』や、一乗谷の含蔵寺に住んでいた斯波氏子息の含蔵寺殿が求めた『鷹百首註』など、養鷹・鷹狩に関する知識を伝える様々な鷹書が伝授されており、越前で養鷹術が広く普及していたことがうかがえます。

では、なぜ一乗谷ではこれほどまでに養鷹が普及していたのでしょうか。実は、日本に初めて鷹狩の技術が伝わった場所が敦賀といわれることが関係しています。『養鷹記』にもこの伝説が記されており、敦賀郡司を務めていた朝倉宗滴が、その歴史的背景を踏まえて記したと考えられています。また、朝倉家中で鷹狩を学ぶ武士たちは、敦賀に來航して鷹狩を伝えた百濟人「米光」の肖像画を持っていたといえます。鷹狩を学ぶ武士たちが歴史と伝統を繰り返し意識し、鷹書に書き写したことが養鷹術普及の背景にあったのかもしれない。

ません。

鷹書の一つに、宗滴秘伝の『斎藤朝倉両家鷹書』が伝わっています。朝倉一族で最も鷹を愛し研究していたのは宗滴といえるでしょう。

関連史料・ゆかりの地

朝倉宗滴邸のあった「金吾谷」



近年、安波賀での発掘調査により出土した石敷遺構 (画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)



漆椀と下駄 (画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

安波賀には「金吾谷」という地名が残っています。金吾とは、朝倉宗滴の官途名を唐風に呼びならわしたもので、安波賀に宗滴の屋敷があったといえます。安波賀は、下城戸を出てすぐ外の地区で、三国湊へつながる足羽川、北庄と美濃を結ぶ美濃街道が通り、都市一乗谷と外界の結節点でした。

【住所】福井市安波賀町 (JR 福井駅から浄教寺行き京福バス「安波賀」下車3分)

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『第20回企画展 戦国のまなびや 朝倉文化 文武を極める』
宮永一美「越前朝倉氏の文化」福井県郷土誌懇談会編『越前・若狭の戦国』岩田書院

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

実戦で大太刀を

振るった勇将、

真柄十郎左衛門



織 田・徳川軍と浅井・朝倉軍の死闘を描いた姉川合戦図屏風。そこにはひとときわ長い刀で戦う武将が描かれています。日本一の大太刀使いとして勇名を馳せた武将、真柄十郎左衛門（直隆）です。

真柄十郎左衛門は、天文5（1536）年に生まれ、朝倉義景の客将となり越前味真野真柄（現在の越前市）に居館を構えました。十



真柄十郎左衛門【姉川合戦図屏風】
（福井県立歴史博物館蔵）

郎左衛門は、越前の刀匠、千代鶴国安の作による五尺三寸（約160センチメートル）の刀の長さには諸説あり。もの大太刀「太郎太刀」で戦ったことで知られ、身長約2メートル、体重は200キロ以上だったと伝わっています。

永禄8（1565）年、室町幕府の政変により、將軍足利義輝が殺害されます。義輝の弟、足利義昭は朝倉義景を頼り、一乗谷に移りました。観桜の宴の際にこんなエピソードが残っています。義昭の家来が「越前の真柄は無双の大力で、大太刀使いとしてその名は天下に鳴り響いている」と述べ、十郎左衛門が呼ばれました。十郎左衛門は、二本の大太刀

を受け取ると、軽々と頭上で振り回し、豪傑ぶりを披露。皆は「夜叉神も及ばない」と感嘆したといえます（『朝倉始末記』）。

その後、足利義昭は織田信長とともに上洛。15代將軍となります。朝倉義景は信長の再三の上洛要請を拒否。浅井長政は同盟関係にあった信長を裏切り、元亀元（1570）年6月、浅井・朝倉軍と織田・徳川軍が戦う姉川の合戦に至りました。この戦に、大太刀を実戦で使ったエピソードが残っています。

徳川軍は朝倉軍の側面を攻撃。大将・朝倉景健が危機に瀕しますが、十郎左衛門は大太刀を振り回し奮戦。田んぼを耕したように屍が転がったといえます。その後、本多忠勝がこの進撃を止めに入り、入れ代わって勾坂式部ら4人が攻撃。十郎左衛門は「唯四人で我に向かうは殊勝なり」と応戦。奮戦の末、鎌槍でかけ倒され、最後は「あっぱれなり、いざ鬼真柄の首をとって武士の誉れにせよ」と首を献上して果てたといえます。

この戦いの様子は「姉川合戦図屏風（福井県立歴史博物館蔵）」に描かれています。勾坂式部に大太刀を振りかざす十郎左衛門は第二扇から第三扇に登場し、古今を通じて最も

大きな太刀を実戦で使ったと言われる十郎左衛門を今に伝えていきます。



真柄十郎左衛門が使用したと伝わる「太郎太刀」のひとつ
「太刀 銘 行光」（白山比咩神社蔵）

天下一の大太刀使いとして名を馳せ、最期は姉川に散った真柄十郎左衛門。彼の武勇は、無類の大太刀ともにも永遠に語り継がれていくのです。

関連史料・ゆかりの地

千代鶴神社



真柄十郎左衛門の「太郎太刀」を製作したとされる千代鶴国安を祀る神社。千代鶴は、越前鎌の製作技術を発明し、地域の鍛冶屋に伝授したことから、越前打刃物の祖とされています。

【住所】越前市京町2-4（JR 武生駅より徒歩10分）

参考資料等

斎藤楓堂『ふるさと味真野』武生市味真野公民館
『北陸の豪勇、真柄十郎左衛門と大太刀、そしてその一族と産業の関わり』不老区

あさくらよしかげ
朝倉義景が厚礼を

尽くした感状を得た男、

だいあんじまたしろう
大安寺又四郎

戦 功をあげた武士を賞し、その戦功を証明する文書である感状。現代に伝わる朝倉義景の感状全50通の内、義景の署名と花押の両方がある原物史料がただ一通存在します。それは、天文24（1555）年9月27日の加賀粟津口（現在の小松市粟津町）における一向一揆戦で戦功をあげた大安寺又四郎への感状（以下「本文書」といいます。）です。

天文24（1555）年の朝倉軍の加賀出兵時に発給された義景の感状は、本文書のほかに14通が確認されていますが、同年9月8日に総大将朝倉宗滴（79歳）が亡くなった後も9月末まで、加賀で戦闘が続いていたことを裏付ける唯一の確かな史料

です。朝倉氏の軍事力の要、宗滴を失つてなお、若い義景（22歳）は戦いを継続させていたのです。

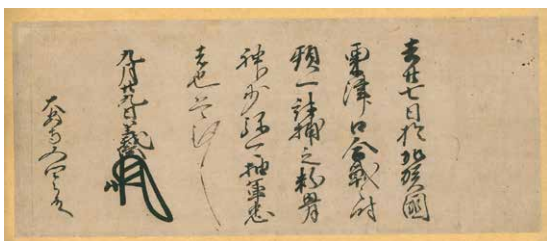
感状には、「加賀国粟津口において合戦の時、敵方の首を一つ討ち取った骨を粉にするようなあなたの働きぶりは神妙である（非常に素晴らしい）。（中略）恐れながら謹んで申し上げる」と記されています。本文書の中で義景は又四郎に対し「恐々謹言」の結びの言葉を用いており、宛名が書かれる位置も高いなど、書簡の礼儀作法上かなりの厚礼を尽くしています。

では、義景がそれほどまでに心を尽くした大安寺又四郎とはどのような人物だったのでしょうか。

敦賀市にある善妙寺が所蔵する永禄元（1558）年の「善妙寺寺領目録」には、隣接する地権者として「高瀬之大安寺殿」との記載があり、又四郎は高瀬（現在の越前市高瀬）を本拠としながら敦賀周辺にも土地を所領していたことがわかります。これを裏付けるように、江戸前期に書かれた『府中寺社堂由緒書』には、洞源寺の所在地（越前市中央一丁目）への移転に際し尽力した人物として「大安寺又四郎元勝」の名前が見えます。又四郎は現在の越前市市街地



大安寺又四郎元勝の位牌
（洞源寺蔵 画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）



朝倉義景感状
（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵）

において一定程度の影響力を有していたことから、この移転に一役買ったと考えられます。さらに、洞源寺に伝わる位牌には「大安寺殿憲翁元勝大居士」と戒名が刻まれています。これらにより彼の名は、大安寺又四郎「元勝」だったということがわかりました。

合戦が行われた記録を示す貴重な史料、感状。これは、朝倉氏を支えた家臣一人一人を紐解く手掛かりとしても重要なものなのです。

関連史料・ゆかりの地

だいあんじまたしろう
大安寺又四郎
ゆかりの洞源寺



（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

まえだといえ
前田利家の菩提寺である宝門寺（越前市高瀬）の末寺、洞源寺。天正8（1580）年、陶の谷（丹生郡越前町、旧宮崎村域）から現在地へ移転しました。

【住所】越前市中央1丁目2-1（JR武生駅より徒歩15分）

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 2015』
石川美咲「手紙が語る歴史秘話 Vol.12 朝倉義景から大安寺又四郎へ一向一揆での戦功を讃える手紙」『月刊江戸楽』エー・アール・ティ株式会社
「第2回特別公開展『今に受け継がれた朝倉氏の記憶』解説シート」福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

朝倉義景時代の

外交官、 鳥居景近

あさくらよしかげ

とりいかげちか

5 代当主朝倉義景の家臣の一人に、義景の側近として活躍した鳥居景近がいます。

鳥居氏はもともと南都興福寺の宗徒（僧兵）で、興福寺領の坂井郡河口庄に代官として派遣され、越前国に土着した一族でした。16世紀前半までに「与一左衛門尉」を名乗る系統と「兵庫助」を名乗る系統に分かれ、景近に代表される兵庫助家は、朝倉氏当主のかなり近い位置におり、『朝倉亭御成記』にも景近が座敷奉行として登場します。

景近は、永祿10（1567）年に義景の「取次」として確かな史料に初出します。取次とは、いわば外交官のことで、当主の発給する外交文



今後は浅井長政としつかりと詳細を示し合わせながら、義昭様の意向に従い行動します。詳しくは、鳥居景近、高橋景業が申し上げます。



朝倉義景書状（個人蔵）

元龜4(1573)年3月12日に義景が朽木元綱に宛てたもの。書状の末尾に詳細は景近、景業両人が伝えると書かれています。

書に付属する副状を発給する役目を担いました。取次は家臣の2人組が務めることが多く、景近とペアを組むのは、元龜2（1571）年以降は高橋景業に固定します。景業の出自は不詳ですが、景近と同様に義景の側近です。両氏の連署状はこれまでに5通が確認されています。

元龜4（1573）年3月12日に近江国の朽木元綱に宛てて出された朝倉義景の書状があります。

將軍義昭様が（織田信長に）敵対されたことについて朽木殿も従われるとのこと、殊勝に思います。道中の安全についてご約束いただいたことから、昨日敦賀に出陣しました。

本状は後世の史料に書かれるのみであった元龜4（1573）年3月11日の敦賀出陣について、その状況を知ることができ、貴重なものです。従来の義景の出陣を語る弱腰のイメージとは全く異なり、この書状からは、義景が浅井氏ら反信長方と緊密に連携を取りながら出兵のタイミングを図っていた様子が見えます。そして、その重要な局面をもにしていたのが景近だったので、なぜなら、書状の末尾に詳細は景近、景業両人が伝えるとあることから、義景の書状よりも詳しい副状が2人の連署状として発給された可

能性が高いからです（ただし、現物は伝来していません）。

当時は、將軍義昭につくか信長につくか武将の立場が分かれる複雑な状況下でした。数日のうちに情勢が変化する中で、景近の外交官としての役割は、とても大きなものだったと考えられます。

外交官として、常に当主義景とともにあった景近。それを物語るように、元龜4（1573）年8月、景近は大野六坊賢松寺で義景とともに果てています。

関連史料・ゆかりの地

鳥居景近・高橋景業の墓



（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

元龜4（1573）年8月20日、鳥居景近は朝倉義景とともに大野の六坊賢松寺で果えました。現在、大野市泉町にある義景墓（写真右奥）のかたわらには、そとと義景を見守るように景近と高橋景業の墓が並んでたたずんでいます。

【住所】大野市泉町10（JR 越前大野駅より徒歩15分）

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 1997』

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『第15回企画展「古文書が語る朝倉氏の歴史」』

「第2回特別公開展『朝倉家臣団—重臣鳥居氏と堀江氏—』解説シート」福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

朝倉・信長・一向一揆を 敵に回し、乱世に散った 富田長繁

鯖 江市長泉寺町を抜ける旧北陸
道の西側、「歯塚大権現」と
呼ばれる小さなお堂の傍らに、一向
一揆との争いに敗れて討死した富
田長繁（長秀）の墓碑（鯖江市指定
文化財）があります。長繁の生きた
時代、越前は朝倉氏が治めていまし
たが、浄土真宗の本願寺派と三門徒
派の対立が激化し、また、天下統一
を目標む織田信長の越前侵攻も迫
り、不穏な様相を呈していました。



富田長繁墓碑

長繁は当初、朝倉義景に仕える武
将でしたが、織田軍による越前侵攻
が始まると、朝倉氏に反旗をひるが
えて信長に寝返ります。天正元
（1573）年に朝倉氏が滅亡した
後、長繁は府中領主に任じられて龍
門寺城に居住し、伊勢長島の一向一
揆の戦いなどで功名を挙げました
が、同じく朝倉氏旧臣でありながら
越前国守護代に任じられた桂田長俊
との処遇の差に不満を持ち、対立を
深めていきます。

その後、長繁は長俊の苛政に苦し
む百姓を煽動して土二揆を起し、
ついには長俊が居住する一乗谷を攻
め落とすことに成功します。しかし、
長繁は次第に一向衆とも対立し、一
揆衆は加賀一向宗と結びついて越前



長泉寺 36 坊のうち唯一現存する中道院

一向一揆に発展しました。天正2
（1574）年2月、長繁は一向一
揆と対立する浄土真宗三門徒派を味
方に付け、長泉寺周辺で激突します。
しかし、休む間もなく無理な戦を仕
掛ける長繁に対し不満を抱く者が出
始め、ついには味方に後方から鉄砲
で撃たれ、24歳の若さで生涯を閉じ
たのです。

長繁の御霊は、中道院の秀運法印
によって弔われました。一方で、進
撃を続ける一向一揆は、朝倉氏旧臣
の武士を滅ぼし、神社仏閣や三門徒
寺院を焼き、他派の寺院に改宗を
迫って越前を制圧しました。

信長の越前侵攻と一向一揆の攻撃
により、長泉寺のほとんどの坊舎は

焼亡し、多くの僧侶や住民たちは離
散しましたが、村人たちは焼け残っ
た仏書・経典を集めて土中に埋め、
経塚を作って納めました。江戸時代
初期の慶安間に、歯痛に悩む村人
がこの経塚に箸を供え回復を祈願し
たところ、歯痛が治るといふ不思議
が起こります。この神妙に感じ入っ
た村人たちは、この歯（箸）塚に小
堂を建てて「歯塚大権現」と称し、
現在に至るまで大切に守られていま
す。そして、いつしかこのお堂の傍
らには、長繁の墓碑が建立され、戦
乱の世を偲ぶ目印となったのです。

関連史料・ゆかりの地

無病息災を祈る・
すりばちやいと
(中道院)



すりばちやいと

今も地名に名が残る長泉寺は 36 坊に七堂伽藍を有した大寺
院でした。戦国期は多くの僧兵が居住しましたが、戦火で灰燼
に帰しました。現在は中道院のみが残り、毎年2月20日と3
月2日に元三大師堂で「すりばちやいと」が行われます。

【住所】鯖江市長泉寺町2丁目7-7（福井鉄道西山公園駅から徒歩7分）

参考資料等

『鯖江郷土史』大和学芸図書株式会社
河野通廣『改訂増補 探古 長泉寺三十六坊の歴史：付、中道院文書の影印・翻刻』

執筆・協力

鯖江市教育委員会文化課

朝倉氏に仕え

金津を百年治めた

溝江氏

越 前国を約100年支配した朝倉氏。その家臣として、現在のあわら市金津に館を構え、その地を治めたのが溝江氏です。数少ない資料から溝江氏の歴史をたどります。

地名として溝江の名前が最初に史料で現れるのは奈良時代で、東大寺の荘園に「溝江荘」が見られます。その後、平安時代中期に奈良・興福寺の荘園・河口荘（かわぐちのしやう）に含まれ「溝江郷」となります。現在のあわら市稲越（いなごえ）から谷畠（たにばた）辺りが範囲だったと考えられています。河口荘は興福寺にとって有力な荘園であり、記録の中にしては登場します。室町時代には有力武士が代官に任命され、溝江郷では

越前守護代の甲斐氏や、後に越前国を治める朝倉氏などが代官となっています。さて、溝江氏とはどのような一族だったのでしょうか？『朝倉義景亭御成記』では、同名衆の中に溝江氏の名前が見られ、また、江戸時代に作られた家系図には朝倉氏庶流（分家）とあります。しかし、これらを裏付ける史料は乏しく、どのような出自なのかは正確にわかっていません。史料で最初に溝江氏の名前が登場するのは、『大乘院寺社雑事記』であり、明応5（1496）年の記事の中に溝江郷代官として「溝江殿朝倉党」と出てきます。これ以降、朝倉氏の家臣として活動が見えられ

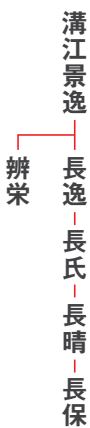
るようになり、特に金津城主として加賀一向一揆との戦いで活躍。溝江氏は、それらの戦いの中で軍功を上げ、勢力を拡大していったのです。



金津城溝江落城之図（あわら市所蔵）

転機が訪れたのは朝倉氏が滅亡したときです。溝江氏は織田氏に寝返り、本領を安堵されますが、天正2（1574）年2月10日、加賀の一向一揆総勢2万余りに取り囲まれ、19日に落城します。城主溝江長逸（ながやす）、その父景逸（かげやす）、長逸の弟で菩提寺の妙隆寺住職辨榮（べんえい）など一族30余人が自害して果てますが、ただ一人、長逸の子の溝江長氏（ながうじ）は難を逃れ、その後織田、豊臣に仕え、家を再興します。特に豊臣秀吉の信任が厚く、越前国

溝江氏略系図



内の豊臣家の蔵入れ地の管理を任せられたほか、政権の吏僚として活躍し、晩年には1万石を与えられます。また、為政者としても優れており、住民の利便を考え、竹田川に橋（現在の市姫橋）を架けています。しかし、長氏は関ヶ原の戦いの直前、慶長5（1600）年2月に亡くなり、跡を継いだ長晴は西軍に味方したため所領を没収。金津の地を離れます。後に、彦根藩で仕官し、子孫はそのまま彦根藩に仕え続け幕末を迎えたのです。

関連史料・ゆかりの地

朱銀振分伊予札二枚胴具足
老領



（あわら市郷土歴史資料館蔵）
※常設では展示していません

本鎧は溝江大炊助長氏が主家の朝倉氏より拝領し所用したと伝承されています。溝江氏は江戸時代に彦根藩へ仕官し、その溝江家に伝わったものです。大きさは胴高34センチメートル、鉢高20センチメートルあります。

一乗谷に舞い降りた

『越前の楊貴妃』

小少将



越前朝倉氏最後の当主、朝倉義景。彼はその生涯で2人の正室と1人の側室をもちました。中でも彼が寵愛し、義景自害の際もともにいたのが小少将(小将ともいいます)です。



朝倉義景肖像
(心月寺蔵)

小少将は、義景の家臣、斎藤兵部少輔の娘であり、生年などはわかりません。

ていません。永禄11(1568)年、義景最初の嫡男・阿君丸が死亡。一門内の争いなどもあり、義景は悲しみに暮れます。また、世子がいなことを家臣らが心配し、悲しみを和らげるためにも美しい側室が必要だと考え、側室に推薦されたのが小少将でした。

小少将は、人の目をひく美しい容貌の持ち主であったことに加え、人の心をつかむ話力も持っている人柄だといわれています。義景は小少将に館を与え、小少将を寵愛。元亀元(1570)年、小少将は、待望の男子、愛王丸を生みます。以降、義景はますます小少将と愛王丸を溺愛するようになり、將軍足利義昭から上洛の命令があった際に兵を動かさ

なかったのも小少将が原因だったのではないかとさえいわれています。

義景の寵愛を受けていた小少将は次第に国中の権力を強めていきましたが、朝倉氏とともに衰退の道を歩んでいくこととなります。天正元(1573)年頃より織田信長の越前攻めが始まり、一乗谷が焼き討ちにあうと、義景は小少将と愛王丸、義景の母・光徳院を連れて大野郡へ逃げ延びます。しかし、朝倉景鏡の裏切りにあい義景は自害。小少将らは丹羽長秀の軍勢に捕らえられ、信長のもとへ連行されました。白昼、ありあわせのヒノキ笠姿で府中(現在の越前市)の街を通る彼女らの姿をみた人々は、いたく嘆いたといわれています。

彼女は、南条今庄の里(南条郡南越前町)で殺されたと伝わっています。しかし、『朝倉始末記』には光徳院と愛王丸が殺されたことは明記されていますが、実は小少将が殺されたことは書かれていません。また、岐阜県の願興寺に「義景の妾が寺に落ち延び、遺児を出産した」という言い伝えがあります。これが小少将であったかどうかはわかりませんが、もしかすると、男性の理性を狂わせるほどの美貌を持ち合わせていた小少将は誰かに助けられ逃げ延

びたのかもしれない。

かつての唐の楊貴妃も、美麗で才知に優れていたことで皇帝の寵愛を一身に受け、最後には一族もろとも殺害されています。まさに『越前の楊貴妃』ともいえる小少将。彼女もまた時代に翻弄された悲劇のヒロインなのです。

関連史料・ゆかりの地

諏訪館跡庭園



一乗谷朝倉氏遺跡の庭園の中でも壮麗な諏訪館跡庭園。朝倉義景が小少将に与えたという館がこの諏訪館でした。その優麗さから、小少将が受けた寵愛の大きさを感ぜられます。

【住所】福井市城戸内町(JR福井駅から浄教寺行き京福バス「武家屋敷前」下車3分)

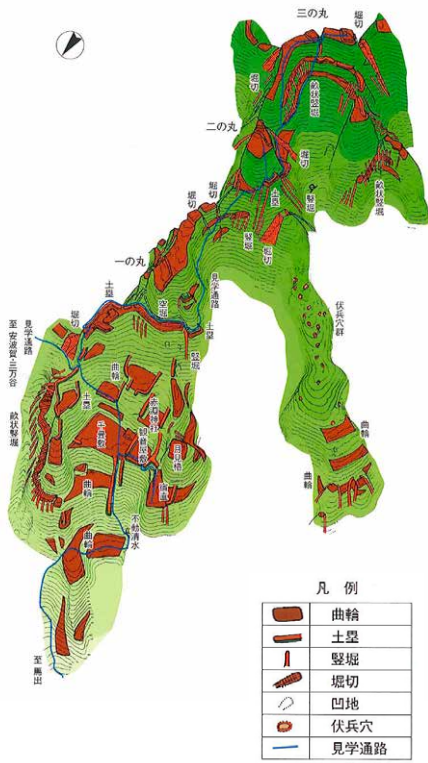
地形だけでなく

支城や防御施設で 守られていた一乗谷

いちじょうだに

朝倉氏が本拠とした一乗谷。ここに城下町を築いた理由は、天然の要塞である山地によって四方が守られていたからです。しかし、朝倉氏は単純に天然の要塞という地形にのみ頼って、諸勢力から城下町を守ろうとしていたのでしょうか。

朝倉氏は、谷が狭くなる地点2か所に城戸（土塁）を築き、一乗谷を南北に閉塞する防御施設として機能させました。南側の城戸を上城戸、北側の城戸を下城戸といいます。また、朝倉館の背後に位置する一



一乗谷城跡模式図

(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

乗城山（標高475メートル）に一乗谷城を築きました。山頂には、千畳敷や一の丸など多くの平坦地のほか、等高線に対して直角方向に斜面を掘って造る畝状堅堀が山城全体で約140条も設けてあり、大変強固な防御施設であったことがうかがえます。

一乗谷城は標高が約470メートルであり、その向かいにある標高約250メートルの御茸山と高低差が大きく、一乗谷城の中の見張り場である「宿直跡」からは遠く福井平野や三国湊を眺めることができ、眺望という点においても、朝倉氏が一乗城山に城を築いた意図を読み取ることができます。

「(朝倉)家景、一乗城に居す」(『朝倉家伝記』)とあるように、早くから一乗谷、もしくは山上の一乗谷城が「本城」としての本格的な防御機能を有していたと考えられます。

そして、一乗谷城の周辺を見渡すと、朝倉一族やその家臣が築いたといわれる「支城」が多く点在しています。この支城が、本城と密接に関連し、敵を迎撃する際や防御する際に補助的な役割を果たしていたのです。支城は、一乗谷の東方、三万谷を越えた旧美山町には小宇坂城、西方に横山城や東大味城、北方には成

願寺城、南方に三峰城があり、三峰城のさらに西方の尾根上には丹波岳城や文殊山城が築かれ、福井平野や鯖江を眼下におさめていました。横山城と東大味城の間の尾根上には、いくつかの地点で尾根が堀で断ち切られている場所があります。これらの城は「点」ではなく「防御線」として連結して機能していたと考えられています。このように、一乗谷の周辺は城や防御施設によって、何重にも防御線が張り巡らされていたのです。

関連史料・ゆかりの地

宿直跡

(一乗谷城跡)



山城見学会の様子

(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)



宿直跡からの眺め

宿直跡からは一乗谷の城下町、足羽川や福井平野を眼下に見下ろし、さらにその奥には日本海までを臨むことができます。三国湊まで眺望がきくことから、朝倉氏の時代には見張りが待機していたのかもしれませんが。

【住所】福井市城戸ノ内町(下城戸跡の北に位置する安波賀という地区から山の尾根筋を登り約1時間30分)

参考資料等

松本泰典「コラム 一乗谷と周辺の城」、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『国指定特別史跡 指定45年記念特別展 一乗谷～戦国城下町の栄華～』

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川美咲

朝倉氏と 京都の古刹との 意外な関係

思い切って大きな決断をするこ
とを「清水の舞台から飛び降り
る」と喩えるのは、いつの頃からか
日本人の常套句です。このことわざ
の舞台である清水寺に「朝倉堂」と
いう御堂があることをご存知でしょ
うか。

一乗谷朝倉氏の初代当主朝倉孝景
は清水寺の千手観音を信仰し、毎日
観音経を唱えていました。孝景は応
仁年間（1467～1469）に在
京しており、その頃の話として、あ
る人が清水寺の本地仏（菩薩）であ
る千手千眼観音像を孝景のもとに
持って来て、これを孝景が得た」と
か、孝景が夢に清水寺の古い仏像
を見た」といった逸話が伝わってい

ます。

文明元（1469）年、清水寺
は応仁の乱の兵火で焼失します。
「十穀坊主」と呼ばれた大勧進願阿
上人は清水寺の再興のため奔走し、
越前の朝倉氏や国人たちはこぞって
奉加（功德を得るために金品を寄進
）しました。彼らの名が列記されてい
る「清水寺再興奉加帳」によれば、
孝景は500貫文、氏景と貞景はそ
れぞれ1000貫文分の柱を寄進し
ています。時の権力者日野富子です
ら120貫文であり、その額は他の
者と比べて桁はずれに多いものでし
た。この他、朝倉氏の国人クラスの
武士は大体20貫文を奉加しており、
これも相当高額です。これら奉加帳
の数字は朝倉氏の清水寺に対する特

別の信仰を物語っています。

また、貞景は、清水寺に法華堂
を建立。造営料と灯明料の田地を
寄進しています。これが現在「朝
倉堂」と呼ばれている建物の前身
で、貞景が亡くなった後の永正11
（1514）年に完成、供養され
ました。その姿は「清水寺参詣曼
荼羅」（16世紀に成立）に描かれて
おり、本堂と同様に舞台作りだっ
たことが注目されます。



朝倉堂の描かれた「清水寺参詣曼荼羅」
音羽山清水寺蔵

（『国宝 清水寺本堂ほか八棟修理工事報告書 第三集（朝倉堂）』より）

永祿5（1562）年、義景に嫡
子が誕生すると、清水寺成就院は早
速お守りや御祝の品を贈っていま
す。また、その後も成就院は義景に
対して年始の御祝として観音画像1
幅と扇、杉原紙などを贈っています。
清水寺も朝倉氏に対する贈答は欠か

さず、そのような関係にあったよう
です。

京都清水寺と深い関係にあった一
乗谷朝倉氏。まさに清水の舞台から
飛び降りるような勢いで行われた多
額の援助は、その信仰の厚さもさる
ことながら、越前を支配する朝倉氏
の絶大な力を物語っています。

関連史料・ゆかりの地

清水寺「朝倉堂」



（『国宝 清水寺本堂ほか八棟修理工事報告書 第三集（朝倉堂）』より）

朝倉氏建立の初代朝倉堂は、寛永6
（1629）年の火災で焼失してしまいま
した。清水寺本堂の西に隣接する現
在の朝倉堂は、江戸初期に再建され
たものです。その後、幾度かの改修
を経て現在に至っており、平成22年
から約3年をかけ、大規模な修理がな
されました。

【住所】京都府京都市東山区清水1丁目294
（JR京都駅から市バス東山通北大路バスターミナ
ルゆき「五条坂」下車徒歩10分）

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『第10回企画展 一乗谷の宗教と信仰』
『国宝 清水寺本堂ほか八棟修理工事報告書 第三集（朝倉堂）』京都府教育庁指導部文化財保護課

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

ステータスシンボル、庭園が教えてくれる 朝倉氏の風情

中 世の庭園には格式があり、その空間は一定のルールに従ってつくられていたことが洛中洛外

図（京都の景観や風俗を描いた屏風絵）の描写から推定されています。洛中洛外図に隣合わせに描かれている細川管領邸と典厩邸。それぞれの庭を見ると、庭園の格式の差



秋の諏訪館跡庭園

撮影：北野武男氏、

画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



冬の朝倉館跡庭園

撮影：北野武男氏、

画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

が見てとれます。当時、將軍の補佐をしていた管領は細川家の本家、典厩は分家という関係にありました。管領邸の庭園には水を湛えた池が描かれている一方、典厩邸の庭園は白砂敷の平庭となっており、將軍邸には池が描かれていることから、池庭が上位の庭園と考

えられていたと指定されています。

このような庭園の格式の差は、一乗谷においても同様に見られ、朝倉氏当主に関係する館・寺院のみが池庭を配することができ、それ以外の屋敷は全て平庭となっています。朝倉氏のナンバー2と目され、5代朝倉義景の従兄弟である朝倉景鏡の館でさえも、平庭を配しています。また、これまでの発掘調査により、50軒以上の町屋が確認されていますが、庭園は1か所も見つかっていません。これらのことから、戦国期において庭園を配することは、ステータスシンボルとしての一面があったといえるでしょう。

朝倉氏が育んだ「朝倉文化」の集大成として、永禄11（1568）年の將軍足利義昭の御成に合わせて造られたのが、当主館（朝倉館）に配された4か所の庭園と建築群です。山裾を背景に池庭を配置し、池庭に張り出すように小座敷（茶の湯座敷）と泉殿（遊芸の場）を建てています。義昭の御成時の宴会の主な舞台となった「十二間（広間）」からは、越前特産の笏谷石でしつらえられた花壇に咲きほこる草花を鑑賞しながら酒宴を楽しんだ姿が想像されます。將軍義昭を

招くことのできる格式の高い庭園として造成されたのです。

朝倉館は、同時期の戦国大名の当主館の大きさに比べると、平坦地として使用できるスペースが決して広くはありませんでした。しかし、谷地形という限られたスペースの中で庭園と建築を巧みに配置しています。武家屋敷や町屋が軒を連ねる一乗谷の賑わいの中に、京で流行していた「市中の山居」（市中にいながら自然に近い空間）たる庭園空間が創造されていたのです。

関連史料・ゆかりの地

湯殿跡庭園



（撮影：北野武男氏、画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

戦国武将らしい豪壮な立石で構成された湯殿跡庭園。あしかがよしあき足利義昭の御成時には朝倉館に東楼があったとの記録があり、東楼から湯殿跡庭園や一乗谷の城下を俯瞰していたのかもしれませんが。

【住所】福井市城戸ノ内町（JR 福井駅から浄教寺行き京福バス「武家屋敷前」下車3分）

知将、明智光秀の 再起の地への 思い



明智光秀肖像（本徳寺蔵）

本能寺の変を起こし、織田信長の生涯が描かれるドラマには必ずといっていいほど登場する武将、明智光秀。光秀に関する史料は少なく、その素顔や生涯は謎に包まれている部分が多くありますが、後に編さんされた『明智軍記』などから、彼が人生のうち約10年を福井（越前）の地で送ったという説があります。

光秀は享禄元（1528）年、美濃国、明智城に明智光鋼（諸説あり）の子として生まれ、美濃の戦国大名、斎藤道三に仕えます。26歳の

時、熙子と結婚しますが、弘治2（1556）年、道三を倒した斎藤義龍（道三の嫡男）に攻められ、明智城は落城。29歳の時、光秀は油坂峠を越えて越前に逃亡します。落着き先は、現在の坂井市丸岡町にある称念寺の門前で、生活は困窮を極めたといわれています。

光秀、35歳の時、転機が訪れます。加賀の一向一揆が越前に襲来した際、光秀は朝倉軍に与し、才智を活かして朝倉軍の勝利に貢献。これを機に、朝倉義景の客臣として迎えられたのです。その際のエピソード

が残っています。光秀が勝利に貢献したことが縁で、朝倉方の武将から「光秀の居宅で歌会を」との交遊の申入れがありました。しかし、極貧生活の光秀には、彼らをもてなす余裕などありません。この時、妻、熙子が光秀のために大切な黒髪を売り、御馳走を用意し、歌会を成功させたといえます。妻の支えが光秀の仕官を叶えたのです。

その後、40歳の時、朝倉に見切りをつけ、信長の家臣となります。天正3（1575）年、主君、信長の越前再侵攻の際にも、こんなエピソードがあります。戦乱の直後、光秀がかつて関わったと伝わる西蓮寺（現在の福井市東大味。一乗谷朝倉氏遺跡の南西）に対し、猛将柴田勝家たちから安堵状が出されました。安堵状は、光秀が住民の安否を気遣い、勝家に依頼し出状させたもので、これにより、西蓮寺は保護され、住民も無事に生活できたといわれています。（今も残る安堵状には、この寺者等は元の場所に帰って住むこと、理不尽なことを言う者がいれば、その者の名前を伝えよ。厳罰に処す」と記載されています。）

越前に感謝し住民を思いやる姿もまた、光秀の素顔なのかもしれません。地元住民は、光秀の思いに応えるように、毎年、命日の6月13日に法要を行い、光秀の遺徳を偲んでいます。

関連史料・ゆかりの地

明智神社（明智光秀屋敷跡）



福井市東大味には、明智光秀が居を構えた跡と地元で伝わる明智神社があります。光秀を祀るその神社で住民は、一向一揆等の敵から知力をもって村を守った光秀に感謝し、「あけつあま（明智様）」と慕い、崇めてきました。住民には、三女、玉（後の細川ガラシャ）はこの地で生まれたという説も伝わっています。

【住所】 福井市東大味土井ノ内
（福井 IC より車で15分）

越前の称念寺門前で

再起を図った

明智光秀



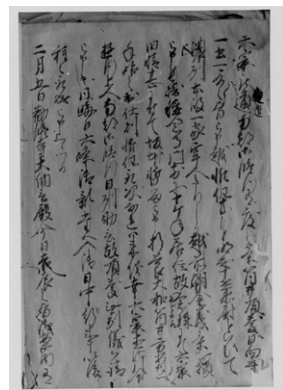
明智光秀肖像（本徳寺蔵）

織田信長に仕えた重臣のひとり
 を急襲した明智光秀。彼の前半生に
 関する史料はほとんどなく、謎に包
 まれています。光秀の一生を記し
 た江戸時代の物語『明智軍記』（現
 存する版本で最古のものは元禄6
 （1693）年）には、光秀が信長
 に仕える以前の記述など他の書物に

は見られない興味深い記載が多くあ
 りますが、あくまでも光秀の死後百
 年以上経って書かれた物語です。光
 秀の足跡において確実といえる部分
 はあるのでしょうか。

『明智軍記』には、光秀は美濃を
 追われた後、越前に入ったと記され
 ています。そして、越前の戦国大名・
 朝倉義景のもとにいた頃、称念寺（現
 在の坂井市）の寺地に妻子を住まわ
 せていたこと、また称念寺の僧とと
 もに山代温泉に湯治に行く途中で三
 国津や雄島を遊覧したこと、光秀が
 三国の船人に日本海上の航路や沿岸
 の湊について尋ねたことなどが記さ
 れています。

実はこの記述の一部を裏付ける史



遊行三十一祖京畿御修行記（部分）
 （画像提供：別願寺）

料があります。時宗の指導者である
 同念という僧が天正6年から8年
 （1578～1580）の間に東海・
 畿内各地を巡った際の記録で、『遊
 行三十一祖京畿御修行記』という
 史料です。信長ら武将たちとの交流
 などが記され、当時の社会情勢を理
 解するうえで貴重なものです。史料
 には、光秀はかつて越前の朝倉義
 景のもとにいた頃に十年間称念寺の
 門前に住んでおり、その時からの友
 情で、遣わした僧が光秀居城の坂本
 城（滋賀県）にしばらく留まったと
 記されており、光秀が称念寺門前
 に居住していたことがわかります。

ちなみに、俳人の松尾芭蕉が知人
 の温かいもてなしを受けた際に、か
 つて光秀の妻が自分の黒髪を売って
 金を工面し、光秀を助けたという逸
 話を思い出し、「月さびよ 明智が
 妻の 咄しせむ」という句を詠んだ
 とされ、その句碑も称念寺に建って
 います。

越前にいて再起を図っていた光
 秀。彼は現在の坂井市域の花鳥風月
 を見聞きしながら、夢と野心を胸に
 抱いていたのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

称念寺



北陸における時宗布教の中心道場と
 して、朝廷や足利將軍家の祈願所と
 なり、朝倉家はじめ歴代の越前国主
 から厚く保護されました。また南北朝
 時代に新田義貞の遺骸が運ばれ葬ら
 れた（『太平記』）ことから、義貞の墓
 所（県史跡）もあります。

【住所】坂井市丸岡町長崎19-17（JR丸岡駅
 より丸岡行き京福バス「舟寄」下車徒歩10分）

参考資料等

『定本 時宗宗典 下巻』時宗宗務所、二木謙一校註『明智軍記』新人物往来社
 みくに龍翔館編『みくに龍翔館第25回特別展「天下人の時代と坂井一戦国武将の息吹と足跡」』、『明智光秀公と時衆・称念寺』称念寺

執筆・協力

みくに龍翔館 学芸員 角 明浩

明智光秀の活躍は 越前から 始まった

あけち みつひで

2020年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」は、明智光秀が主人公です。光秀は越前ゆかりの戦国武将であり、その事跡を追ってみたいと思います。

光秀が織田信長の家臣であったことは知られるところですが、信長に仕えるまでの前半生については確かな記録がなく、出自も含めその様子はよくわかっていません。しかし、信長に仕える直前までは越前の朝倉氏のもとにいたと考えられています。

光秀がいつ頃から朝倉氏のもとにいたかは明らかではありませんが、永禄10（1567）年以後の室町幕府15代将軍となる足利義昭が朝倉氏



朝倉義景館跡

に援助を求めてやってくると、義昭にも仕えるようになったとされています。義昭の家臣には、後に盟友となる細川藤孝ほそかわとうかがおり、光秀とはこの時に知り合い、親交を深めていきます。天正6（1578）年には、信長の命で光秀の娘である玉（ガラ

シャ）は、藤孝の長男忠興ただむきに嫁ぐこととなります。

永禄11（1568）年7月に、義昭は信長のもとへ身を寄せることとなります（光秀は同年中に合流）。義昭、藤孝、光秀の3者による協議の末、この決断をしたともいわれています。

この頃に信長が藤孝に宛てた書状に、年が書かれていない6月12日付と8月14日付のものがあります。そこには「明智に申し含めておいたから、それを義昭様に披露してほしい」と記されています。この書状の花押は永禄12（1569）年以降のものとする説もありますが、内容から永禄11年のものともいわれており、もし永禄11年だとすれば、光秀が信長の意を受けて、一乗谷にいた義昭と交渉していたことが分かる史料といえるのです。

信長のもとに行つてからも、光秀は引き続き義昭の家臣であったとされますが、信長と義昭の関係が悪化していくと、信長の家臣となります。その後は、かつて自身が過ごした越前をはじめ各地に転戦するほか、官僚的な業務など多くの任務を引き受け、多大な功績をあげていきます。その報償として近江の一部と

丹波一国を与えられ、信長政権でも有数の大名となりますが、天正10（1582）年6月2日に本能寺の変を起し、主君である信長を討つのです。

本能寺の変を起した理由は諸説あつて謎に包まれています。この信長と光秀の関係はもとを辿れば、光秀が越前にいた時から始まるのであり、それがなければ本能寺の変も起らなかったかもしれません。

ここ越前は、光秀の活躍が始まり、大きな歴史が動きはじめた場所なのです。

関連史料・ゆかりの地

御所・安養寺跡



朝倉氏の本拠地であった一乗谷朝倉氏遺跡には、足利義昭が滞在していたと考えられる「御所・安養寺跡」と呼ばれる場所があります。ここに明智光秀、細川藤孝などが集まり、信長のもとに行くという協議を行っていたのかもしれない。

【住所】福井市東新町
（JR福井駅より京福バス東郷線で約30分「一乗小学校」下車徒歩5分）

参考資料等

高柳光寿『明智光秀』吉川弘文館、小和田哲男『明智光秀と本能寺の変』PHP文庫
谷口研語『明智光秀・浪人出身の外様大名の実像』洋泉社

執筆・協力

福井市立郷土歴史博物館

あしかがよしあき あけちみつひで
足利義昭と明智光秀の

ゆかりの地、
御所・安養寺跡



乗谷朝倉氏遺跡の南側に位置する御所・安養寺跡。ここが、將軍足利義昭が織田信長に担がれて上洛する3か月前まで滞在していた場所であることをご存知でしょうか。

一つの場所として呼んでいます。本来は御所跡と安養寺跡という隣接した2つの遺跡から成り立っています。明治9（1876）年の地籍図には、一乗谷の東新町の小字の中に「五所」「安如寺」などがみえます。

御所跡には、永禄10（1567）年から翌11年にかけての9か月間、義昭が滞在しています。御所跡では発掘調査が行われましたが、後世に



御所・安養寺跡
(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

行われた土地改良事業等により大きく削平を受けていたため、溝跡などの少数の遺構が確認されただけで、建物の配置などは分かりませんでした。

御所跡の南側に立地する安養寺跡



一乗谷全景
(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

は、現在の福井市足羽1丁目にある浄土宗西山禅林寺派の寺院が戦国時代に存在した所です。寺伝によれば、もともとは府中（現在の越前市）にありましたが、文明5（1473）年に朝倉孝景が一乗谷に建立したと伝えられています。同寺は広大な寺地を持つ一乗谷でも最も大きな寺院の一つでした。義昭が一乗谷に下向し、ここを御所としたのも、安養寺が規模の大きな寺院であったことが一つの要因と考えられています。発掘調査では、数棟の建物跡や石垣、池、溝跡等、寺院跡の一部が確認されています。これらの建物跡群の背後にある谷の中には、現在も多くの石仏・石塔などが残されています。

義昭が一乗谷に滞在した頃、どのような人物が越前に来ていたので

しようか。この頃作成された義昭に従う幕臣や各地の大名を記したりスット「光源院殿御代当参衆并足軽以下衆覚」に、興味深い名前があります。「足軽」の一人として、明智光秀の名があるのです。この史料から光秀は当時、流浪する義昭の側に仕えていたと考えられています。義昭が信長に担がれて上洛するにあたり、信長との交渉で大きな役割を果たしたのは光秀だったといわれています。その奔走の舞台の一つは、この御所・安養寺跡だったのかもしれませんが。

関連史料・ゆかりの地

上城戸跡



(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

上城戸跡の外に位置する東新町の小字には「斎藤」という字があります。斎藤道三の孫、龍興は、朝倉氏とともに刀根坂の戦いで討死にしており、一乗谷にも滞在していたと考えられています。同時代を生き光秀と龍興、二人はどこかで会ったことがあるかもしれません。

【住所】福井市東新町(JR 福井駅から浄教寺行き京福バス「一乗小学校前」下車徒歩1分)

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編 『一乗谷朝倉氏遺跡特別史跡指定 40周年 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館開館 30周年 一乗谷朝倉氏庭園特別名勝指定 20周年 記念特別展 戦国城下町一乗谷を歩く 一発掘調査と環境整備のあゆみー』 柴裕之編『図説 明智光秀』戎光祥出版

執筆・協力

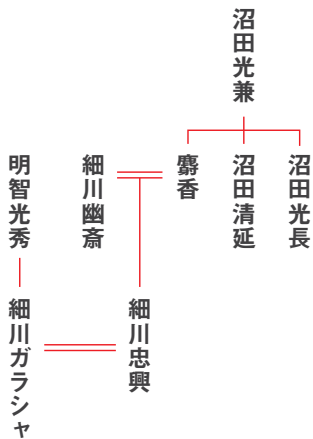
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲

若狭と近江の 国境・熊川と 明智光秀の 関係

若 狭と畿内を結んだ街道、いわゆる鯖街道のうち、最大の物流量を誇った若狭街道。小浜から熊川、滋賀県・朽木、花折峠を越えて京都・大原から出町柳に至るその道程は、室町・戦国時代は軍事上の大きな役割も果たしているのです。その要所となったのが、近江国との国境である熊川です。この熊川と戦国一の知将、明智光秀とのゆかりを探ります。

足利將軍直属の家臣で、若狭と近江の国境の熊川城主でもあった沼田光兼。光兼の娘、麿香は、同じく足利直属の家臣、細川幽斎（藤孝）の妻となった人物です。麿香は度量が広くしつかり者で、関ヶ原の戦いの

関係系図



前哨戦である田辺城の戦い（慶長5（1600）年）では、女性でありながら具足を身にまとい籠城し、紅をもつて陣営を描いたりしたといわれています。幽斎に側室はおらず、麿香を生涯一人の妻として添い遂げました。幽斎は光秀の盟友でもあり、

足利義昭の將軍任官に奔走したこと
で知られていますが、その夫を支え、
細川家の礎を築いた賢夫人が熊川出
身の麿香だったのです。

また、幽斎、麿香の間に生まれた
長男、細川忠興の夫人となったのが
受洗名をガラシャとされた、光秀の
娘、玉です。麿香は玉の姑になります。

この明智の血を引き、細川家の家
臣となった一族に三宅氏がありま
す。三宅家には、光秀が書いた手紙
が残されています。それは、織田
信長に重用され熊川に先に着いた光
秀から、足利の近臣である幽斎ら三
人に宛てたものです。日付は、永禄
13（1570）年卯月廿日となつて
おり、朝倉攻めに際して、信長自身
が熊川に到着して越前に向かう2日
前のものです。この手紙に、武田家
の老中が熊川において信長を迎える
ことや、越前口や近江北部には何も
問題はないことを伝え、何かあれば
申し上げるなどと書かれています。
手紙は、戦いの直前の状況を伝える
第一級の史料です。この史料は、幽
斎、信長、羽柴秀吉、徳川家康に加
えて、光秀も熊川に確かに着陣した
ことを裏付けるものです。

国境の要衝、熊川。光秀とゆかり
の深いこの地は、その後、若狭国主

となった浅野長政によって宿場町と
して整備が進められます。そして、
江戸時代には、問屋、旅籠、商家な
ど200戸が立
ち並び、人と物
が行き交う街道
の要所として大
きな発展を遂げ
ていくのです。



永禄13年4月20日付
明智光秀書状『三宅家文書』

（三宅久美子氏寄贈・熊本
県立美術館蔵）

関連史料・ゆかりの地

沼田氏供養塔 （得法寺）



山城であった熊川城の下方にある得法寺の東側に、沼田家の供養塔とされる石塔が現在も祀られています。平成5年には、細川家17代当主、細川護貞氏が、熊川宿の国の重要伝統的建造物群保存地区選定に向けた応援のために、この地を訪れています。

【住所】三方上中郡若狭町熊川33-26
（JR上中駅からJRバス若江線「若狭熊川」下車徒歩6分）

参考資料等

三宅家史料刊行会編『明智一族 三宅家の史料』清文堂出版
稲葉継陽『信長に重用されはじめた光秀の手紙』細川ガラシャ 熊本県立美術館

執筆・協力

若狭町歴史文化課

中世の若狭を 治めた守護職 武田氏の盛衰



武田元光肖像
(発心寺蔵)

図があつたものと思われまゝ。また、若狭武田氏は代々文芸にも力を入れ、和歌・連歌・蹴鞠などを嗜み、三条西実隆など当代一流の文化人と交流を持ちました。後瀬山城跡には発掘調査により、山上に築山遺構や建物跡があり、茶器なども確認されています。特にこういふ庭園遺構は全国的にも他に3例しか確認されておらず、まさに文化的素養の高かつた若狭武田氏らしいものといえます。

しかし、大永7(1527)年の



後瀬山遠景
(小浜市教育委員会提供)

の寺社領等の荘園を強行に押さえ、若狭支配の経済的基盤を築き上げました。また、応仁・文明の乱の際には東軍の将として活躍しました。なお、4代元信までは西津に守護館がありました。その跡を継いだ5代元光が大永2(1522)年に後瀬山の山上に城郭を築き、併せて山麓に館を建設しました。

後瀬山城跡は、若狭を東西に通過

する丹後街道を足下におき、小浜湊を眼下に見下ろせる場所にありま

す。これは、経済的にも軍事的にも適した場所に城館を設置することに

より、長年争っている丹後一色氏の残党が小浜に入ってくるのを防ぐと

ともに、日本海交易の主要港となっていた小浜湊の経済力を掌握する意

安 芸分郡守護武田信榮は、永享12(1440)年に足利義教

の命を受け、一色義貫を討ちました。

これにより、義貫の所領若狭国を拝領して若狭守護職となり、ここに若

狭武田氏が成立したのです。

若狭守護職は初代信榮から8代元明まで続きます。2代信賢は領内



後瀬山城跡
築山遺構
(小浜市教育委員会提供)



後瀬山城跡
出土遺物(茶器)
(小浜市教育委員会蔵)

京都桂川の合戦で、5代元光の軍は大敗北を喫し、この混乱に乗じた丹後海賊が若狭を襲撃。これにより若狭武田氏は衰退の途を進むこととなります。その後の信豊、義統、元明も情勢を転換することはできず、永禄11(1568)年、朝倉義景の軍勢が若狭へ侵攻し、後瀬山城を攻撃した際に元明は越前へ連れていかれてしまいました。

関連史料・ゆかりの地

発心寺



武田元光墓塔

若狭武田氏5代元光は、発心寺を再興して隠居し天文20(1551)年に没しました。元光墓塔は宝篋印塔で、没後直ちに造立されたものと推定されます。若狭武田氏歴代当主の墓塔中、埋蔵施設として現存するものはこの1基のみです。

【住所】小浜市伏原45-3
(JR小浜駅より徒歩10分)

天正元(1573)年、丹羽長秀が若狭を領することとなり、天正9(1581)年には織田信長から逸見氏の旧領の内3千石をあてがわれ、若狭武田氏は辛うじてその名望を保っていました。しかし、天正10(1582)年、本能寺の変が起り、山崎の合戦に勝利した羽柴秀吉によって光秀が減ぼされると、元明は明智光秀に同心したということで近江海津に呼び出され、長秀によって切腹させられます。栄華を誇った若狭武田氏は滅びることとなったのです。

「難攻不落」の

若狭国吉城と

「国吉籠城戦」の真実

夜襲など、語り手である田辺半太夫の実体験ゆえ、詳細で激しく、リアル感があります。攻める朝倉勢も、大軍の力攻めや付城の築城、青田刈り、乱捕り、調略、当主の武田孫八郎元明の拉致（朝倉側では保護）と、あらゆる戦術を用いました。実際に、朝倉勢が築いたという付城群は現存しており、元明が一乗谷に居住していたことも史実です。

永 禄6（1563）年から数年に渡り、越前朝倉氏を相手に激しい籠城戦を繰り広げた城がありました。美浜町佐柿にあった山城、国吉城です。城主は若狭国守護大名武田氏の重臣、粟屋越中守勝久で、「難攻不落の城」として知られています。その戦いの様子は、粟屋方に参加した地侍、田辺半太夫安次が昔語りとして残し、江戸時代を通じて様々な人が書き写し、軍記『国吉籠城記』として広まりました。しかし、ここで描かれている、若狭国を我が物にしようとする朝倉勢の侵攻を粟屋方が撃退するという物語は、全て史実というわけではありません。

まず、この城は当時「国吉城」で

はなく、地名の「サガキ（佐柿）城」と呼ばれていました。「南北朝期に常国国吉が築き、国吉の城と呼ばれた。」というエピソードが『国吉籠城記』に記され、定着したとみられますが、勝久の子孫は「サガキ（佐賀伎）城」と書き残しています。

また、朝倉氏の若狭侵攻も、実は縁戚関係にある武田氏の支援が目的でした。当時の武田氏は、当主の家督争いや重臣の謀反等が相次ぎ、朝倉氏を頼りに権力を強化したい当主らと、朝倉氏の影響を排除したい勝久ら家臣団の対立があったのです。

一方で、戦いの描写は、侵攻する朝倉勢を食い止めた関峠の迎撃戦、国吉城の籠城戦法、中山の付城への

元亀元（1570）年4月、勝久は国吉城に織田信長を迎え、朝倉攻めに加わりました。この戦いは織田軍の撤退で幕を閉じますが、織田軍は国吉城を経由して京に撤退しています。国吉城の目前、佐田の海岸で朝倉勢に追われて壊滅寸前の木下秀吉隊を、同じく撤退中の徳川家康軍が救ったという地元の伝承もあります。無事に撤退した織田・徳川軍は、同年6月に近江国姉川で浅井・朝倉軍と激突して勝利したのです。

もし、国吉籠城戦で国吉城が落城していたら、織田軍の朝倉攻めも違ったものとなっていただでしょう。粟屋勝久の活躍と国吉籠城戦の結果がもたらしたその後の歴史への影響



本丸跡に建つ 国吉城址碑

は、決して小さいものではなかったといえます。



若狭国吉城址全景

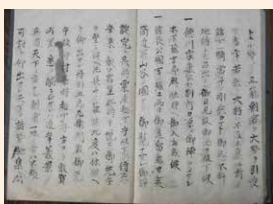
関連史料・ゆかりの地

軍記『国吉籠城記』と 田辺半太夫家伝来の甲冑



いよねだんがえにまいどうくそく 伊予札段替二枚胴具足 (田辺半太夫家旧蔵)

【住所】若狭国吉城歴史資料館：美浜町佐柿25-2（美浜ICより車で約5分）



『佐柿国吉籠城記全』天保13（1842）年（若狭国吉城歴史資料館蔵）

国吉籠城戦に粟屋方として参戦した地侍、田辺半太夫安次が、戦いの様子を昔語りとして記した『国吉城之記』が江戸時代を通じて書きされ、世に広まった軍記物。同家伝来の甲冑も残っています。

参考資料等

美浜町教育委員会編『戦国若狭と国吉城（佐柿国吉城ブックレット国吉城の章第2巻）』、『山東の歴史と風土』美浜文化叢書刊行会『平成29年度秋季企画展図録「徳川家康～美浜に残した足跡をたどる～」』若狭国吉城歴史資料館

執筆・協力

若狭国吉城歴史資料館 館長 大野 康弘

高浜繁栄の道 を拓いた逸見昌経



木造 逸見駿河守昌経坐像 (園松寺蔵)

逸 見昌経は若狭武田氏の四奉行の1人であり、越前国との境を守る粟屋氏と同じく丹後国との境を守る役割を果たしていました。昌経は、文・武の将のどちらかといわれれば「武の将」のイメージが強いといえますが、本当はどうだったのでしょうか。

昌経は守護若狭武田氏に対して二度の反乱を起こし、「永禄4年の反乱」では本拠地であった碎導山城(大飯郡高浜町)が落城しています。その後、その武力の中心が海軍であったこともあり、永禄8(1565)

年、全国的に山城が主流であった中で、いち早く平山城、または海城ともいわれる高浜城を築城し、翌年には再び若狭武田氏に対して反乱を起こしています。

そんな「武の将」のイメージが強い逸見昌経ですが、実は「文」にも優れており、経済的な側面からも高浜の繁栄に寄与するなど、現在の高浜の礎を築いた人物ともいえます。

高浜町内に『市蛭子斎祭記録』という資料が残っています。高浜町内の本町区に鎮座する皇大神宮、恵比須神社の年数録です。この本町区という地域は丹後街道が地区の中央を

通っており、現在も商店が軒を連ねています。また町内を流れる子生川と海の交わる地点であったこともあり、昔から船の荷揚げ場でもあり、高浜地区の重要な物流拠点でもありました。

昌経がこの地を治めていた時期には、12軒の間屋が毎月六斎の日(8日、14日、15日、23日、29日、30日)に市をたて品物の売買が行われ、後には18軒にまで増えたと記録されています。市を行うためには昌経の許可が必要であり、昌経が早くから高浜の繁栄のためには経済の発展が重要と考え、そのために市をたてることを推奨していたことがうかがえます。

昌経が亡くなった天正9(1581)年3月26日以降、市は一旦途絶えました。慶長年中(1596)



めいきょうどう 明鏡洞

1615)に再開し、青郷村や内浦村、佐分里(佐分利)村から市へ出店するものもいました。その後、市は、大西町からの出火大類焼で売買が止まる享保12(1727)年まで続きました。



本町区皇大神宮移転 卅百年記念 復刻版 (写真提供: 高浜町郷土資料館)

関連史料・ゆかりの地

皇大神宮

高浜七年祭の太刀振り



ことしろぬしのおおかみ おおくにぬしのおおかみ
始まりは南北朝時代といわれ、事代主大神と大國主大神が祀られています。「高浜七年祭」では、中ノ山の太刀振りが奉納されます。

【住所】大飯郡高浜町事代2-1 (JR若狭高浜駅より徒歩9分)

参考資料等

舘太正『本町区皇大神宮移転卅百年記念 復刻版』
高浜町郷土資料館編『平成12年度企画展図録「戦乱の高浜城主 逸見昌経展」』

執筆・協力

高浜町郷土資料館 主査 寺下 千代美

浄土真宗の古刹に 眠る女性の 肖像画の謎



絹本着色伝如祐尼像
(西光寺蔵)

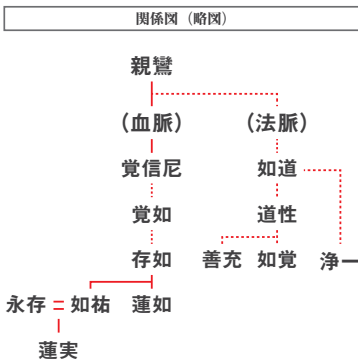


如祐尼像 (復元図)

鯖 江市杉本町にある西光寺。浄土真宗本願寺派中興の祖、蓮如(本願寺8世)の父である存如が創建したお寺です。この寺宝に、上畳に右斜め向きに座り、頭巾状のかぶり物を付けた女性を描いた肖像画があります。制作年代は室町時代と考えられ、描かれているのは蓮如の妹、如祐といわれています。この時代の女性が肖像画として描かれることは非常に稀で、風俗的にも絵画的にも極めて貴重なものです。西光寺は、越前における本願寺派の中心として勢力を拡大しましたが、戦国動乱のなかで浄土真宗教団はどのよ

うな歴史をたどっていったのでしょうか。

13世紀後半、浄土真宗の祖、親鸞の弟子たちが各地で教団を形成する中、北陸地方にも教団が進出。正応



3(1290)年に親鸞の法脈を継ぐ如道が越前に進出して布教活動を始めました。その後、教団は道性・如覚・浄一らに受け継がれ、三門徒派が形成されました。親鸞の娘、覚信尼も京都東山に親鸞の墓所を営み、曾孫である覚如がこれを寺院化して「本願寺」と称しました。

しかし、本願寺の寺勢は振るわず、存如は蓮如とともに北陸への布教に赴くことを決意。宝徳3(1451)年、彼らは丹生郡石田村(現在の鯖江市)に到達して、西光寺を建立しました。存如はその後、約3年間にわたってこの地で教化の基礎を固め、長女の如祐は婿となった永存とともに、西光寺を引き継ぎました。

この頃、蓮如は門徒数を増やしていましたが、教義の違いから三門徒派と激しく対立。この対立は越前の政局にも大きな影響を与えることになっていきます。文明5(1473)年になると永存・如祐は4男、蓮実を伴って栃川(丹生郡越前町)に隠居し、永存没後、母子は加賀に赴きました。

天正2(1574)年、一向一揆に参画した西光寺5代、真敬は織田信長軍の越前侵攻に際して蜂起します。北陸道の要衝木ノ芽峠に西光寺丸を築き、織田軍に立ち向かいましたが、翌年8月16日に真敬は戦死、

西光寺の堂宇も焼失してしまいました。その後、西光寺は現在地に再建され、江戸時代には立待村の中心寺院として長く尊崇を集めていくこととなります。

さて、冒頭の如祐の肖像画は当初は極めて小振りであったそうです。これは、私的に描かせたものであるという理由のほか、持ち運びの便を考えたためとも考えられています。如祐の生涯については不明なところも多いですが、その姿を伝える貴重な史料として後世に引き継がれていくのです。

関連史料・ゆかりの地

本願寺派と対立した三門徒派の寺院



誠照寺

如道の教えを受けた道性は願土を求めて横越(鯖江市)に證誠寺を建立します。その後、嫡男の善充が證誠寺を継ぎ、次男の如覚が誠照寺を、三男の道幸が常楽寺(廃寺)を建立しました。彼らは、三門徒教団の中心として戦国の世を駆け抜きました。

【住所】 證誠寺: 鯖江市横越町 13-43 (鯖江 IC から車で 5 分)
誠照寺: 鯖江市本町 3 丁目 2-38 (福井鉄道西鯖江駅から徒歩 5 分)

参考資料等

『福井県史』通史編 3 福井県、鯖江市史編纂委員会編『鯖江市史』通史編上 鯖江市
本山證誠寺史編纂委員会編『真宗山元派本山 證誠寺史』

執筆・協力

鯖江市教育委員会文化課

戦国大名が 愛した幸若舞

（越前生まれの日本を代表する芸能）



織 田信長や豊臣秀吉が愛したとされる伝統芸能、幸若舞。室町時代に桃井直詮（幼名 幸若丸）

によって興され、その一族が現在の越前町西田中周辺に住居を構え活動したことから、越前町が発祥の地とされています。数々の武将たちに愛された幸若舞の歴史はどういったものだったのでしょうか。

戦国時代の英傑・織田信長が幸若舞を愛好していたことは有名ですが、幸若舞の演目のうち、特に『敦盛』を好みました。永禄3（1560）年5月19日、今川義元との桶狭間の戦いに向かう信長は、『敦盛』を自ら舞った後に出陣したと伝えられているほどです。『信長公記』には、

当時の様子が次のように描写されています。「信長は『敦盛』の舞を舞った。『人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。ひとたび生を得て、滅せぬ者のあるべきか』と歌い舞って、『ホラ貝を吹け、武器をよこせ』と言い、甲を着け、立つたまま食事をとり、兜をかぶって出陣した。」（中川太古訳『現代語訳 信長公記（新人物文庫）』中経出版）



豊臣秀吉朱印状（領知行）
（越前町教育委員会所蔵）

信長が幸若家を庇護したことを伝える史料が残されています。信長が朝倉氏を滅ぼした5か月後にあたる天正2（1574）年1月6日に発給された文書には、幸若八郎九郎へ100石の領地を与える旨が示されています。この文書は幸若家の知行地についての最古の記録で、越前に幸若家の領地が誕生した瞬間といえます。

幸若家の領地支配を認めたのは、織田信長だけではありません。天正9（1581）年6月2日の「柴田勝家判物」、天正11（1583）年8月21日の「丹羽長秀判物」、天正12（1584）年8月8日の「丹羽長秀判物」、天正13（1585）年6月11日の「丹羽長重判物」など、その後越前を支配した大名たちが発給した文書にも同様の記録がみえます。特に慶長3（1598）年7月28日の「豊臣秀吉朱印状」には「越前国朝日村のうち224石8斗3升・「けい（氣比）庄（の）うち120石1斗7升」とあり、越前町朝日区と氣比庄区にまたがって幸若家が領地を保有していたことがわかります。

江戸時代に入ると、幸若弥次郎家・八郎九郎家・小八郎家が西田中・朝

日村、伊右衛門家が天王・宝泉寺村、五郎右衛門家が敦賀田島村を中心に合計1,175石の知行地を与えられ、幸若家はますます繁栄しています。同じ頃、幸若舞は幕府の式楽となり、日本を代表する芸能となっていくのです。

関連史料・ゆかりの地

「幸若音曲発祥の地碑」と
越前町幸若文化情報センター
（越前町立図書館）



越前町幸若文化情報センター



幸若音曲発祥の地碑

「幸若音曲発祥の地碑」が建つ地は、かつて幸若3家のひとつ幸若八郎九郎家の屋敷地でした。越前町幸若文化情報センターは幸若展示室・幸若研究室・幸若資料室を備え、幸若舞に関する調査・研究の拠点として整備されています。

【住所】

〈幸若音曲発祥の地碑〉 丹生郡越前町西田中8-20-22 越前町社会福祉センター敷地内
（JR 福井駅より福鉄バス福浦線で50分「越前町役場前」下車徒歩5分）
〈越前町幸若文化情報センター〉 丹生郡越前町西田中2-210
（JR 福井駅より福鉄バス福浦線で45分「図書館前」下車徒歩1分）

参考資料等

朝日町誌編集委員会編『朝日町誌』資料編1 朝日町役場、越前町教育委員会編『越前幸若舞を知る100項』
中川太古訳『現代語訳 信長公記（新人物文庫）』中経出版

執筆・協力

越前町織田文化歴史館 学芸員 村上 雅紀

北陸の奇勝、 東尋坊と平泉寺の つながり

北陸を代表する観光地のひとつ、東尋坊。その地名は、日本海から九頭竜川を約50キロメートルさかのぼった白山信仰の拠点、平泉寺の僧侶に由来するといわれています。平泉寺と東尋坊のつながりはどんなものなのでしょうか。



東尋坊

苔の美しさでも有名な平泉寺は、今から約1300年前の養老元(717)年に開かれ、天台宗比叡山延暦寺の末寺として大きく発展しました。戦国時代には48社36堂6千坊、寺領9万石・貫、僧兵8千人を擁したといわれます。

平成元年から始まった発掘調査によって、戦国時代頃の石畳道や坊院跡、大量の陶磁器が発見されました。他にも、砦や堀切など、約200ヘクタールにも及ぶ広大な範囲に戦国時代の遺跡が残されています。戦国時代は戦国大名や武士の時代と考えがちですが、寺社こそが石垣などの最先端の土木技術をもち、芸能や商工業に関わる人々を抱え、高度な文

化や経済力を備えていたのです。平泉寺の発掘調査によって、日本中世における宗教都市の実像が解明されつつあります。



平泉寺の石畳道

さて、この平泉寺には東尋坊という僧侶がいたと伝わっています。戦国大名朝倉氏の盛衰を記した軍記物語『朝倉始末記』や江戸時代に編纂された書物によると、東尋坊は平安時代終わり頃の「強力悪僧」であり、平泉寺のなかで疎まれていました。そのため、他の僧たちは、日本海の岸壁の上で宴会を催し、酒に酔った東尋坊を崖の上から突き落とします。すると、海が荒れ、雷が鳴り、豪雨となってその場にいた僧侶に多くの死傷者がありました。その後、毎年平泉寺の祭礼が行われる4月5日には、雲が起きて暴風雨となり、海も荒れるので、近くの漁師たちも船

を出すのを控えたそうです。

当時の様子を伝える貴重な資料「中宮白山平泉寺境内図」が平泉寺白山神社に伝わっています。この中には東尋坊が描かれており、現在も参道沿いに東尋坊跡が残っています。また、平泉寺の菩提林手間にある下馬大橋付近には「唐人防(坊)田」という地名もあります。東尋坊の伝説は、平泉寺の影響力が九頭竜川河口の三国湊(みなと)周辺に及んでいたことを示しているともいえるのではないのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地



平泉寺東尋坊の井戸

平泉寺白山神社参道の脇にある東尋坊跡。敷地の奥には古井戸が残されています。東尋坊が突き落とされたとき井戸は血の色に染まり、その後も井戸に米ぬかを入れると、三国の海に浮かび上がるといわれています。

【住所】 勝山市平泉寺町平泉寺64-34 (福井北 IC から車で約35分)